

檜隈寺跡(高市郡明日香村)

ひのくまでらあと

あちのおみ

おみあしじんじゃ

ここは阿知使主を祀ったとされる於美阿志神社/檜隈寺跡は、この神社の境内にある

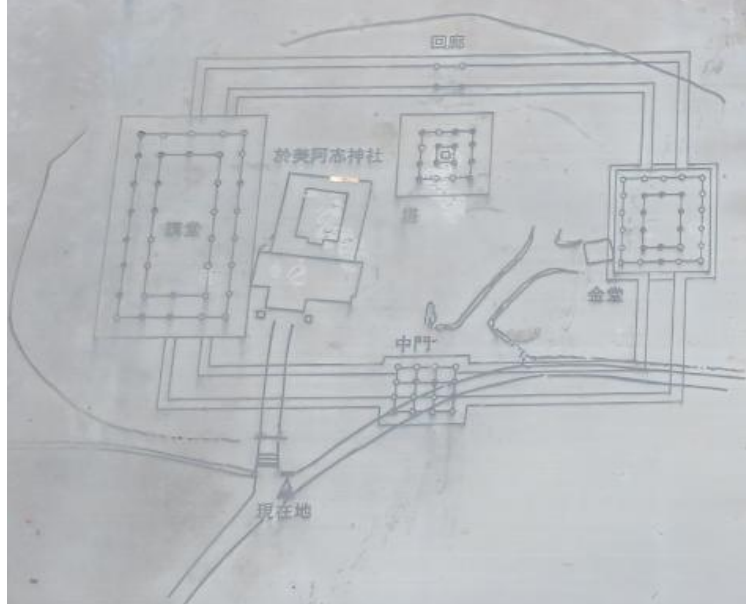


境内には塔・講堂跡と推定される建物跡や礎石が残っている/檜隈の地は飛鳥に隣接し、渡来人の里として重要な地であり、なかでも東漢氏(やまとのあやうじ)らが集住した場所とされる/東漢氏は7世紀には蘇我氏の側近として活躍していた氏族で、その末裔には東北征伐で名高い坂上田村麻呂がいると云う/檜隈寺は7世紀後半~8世紀初頭に東漢氏の氏寺として建立されたい



檜隈の地は百濟から渡来した東漢氏の祖とされる阿智使主が居住したと伝わり、檜隈寺跡に於美阿志神社が建立されたようだ

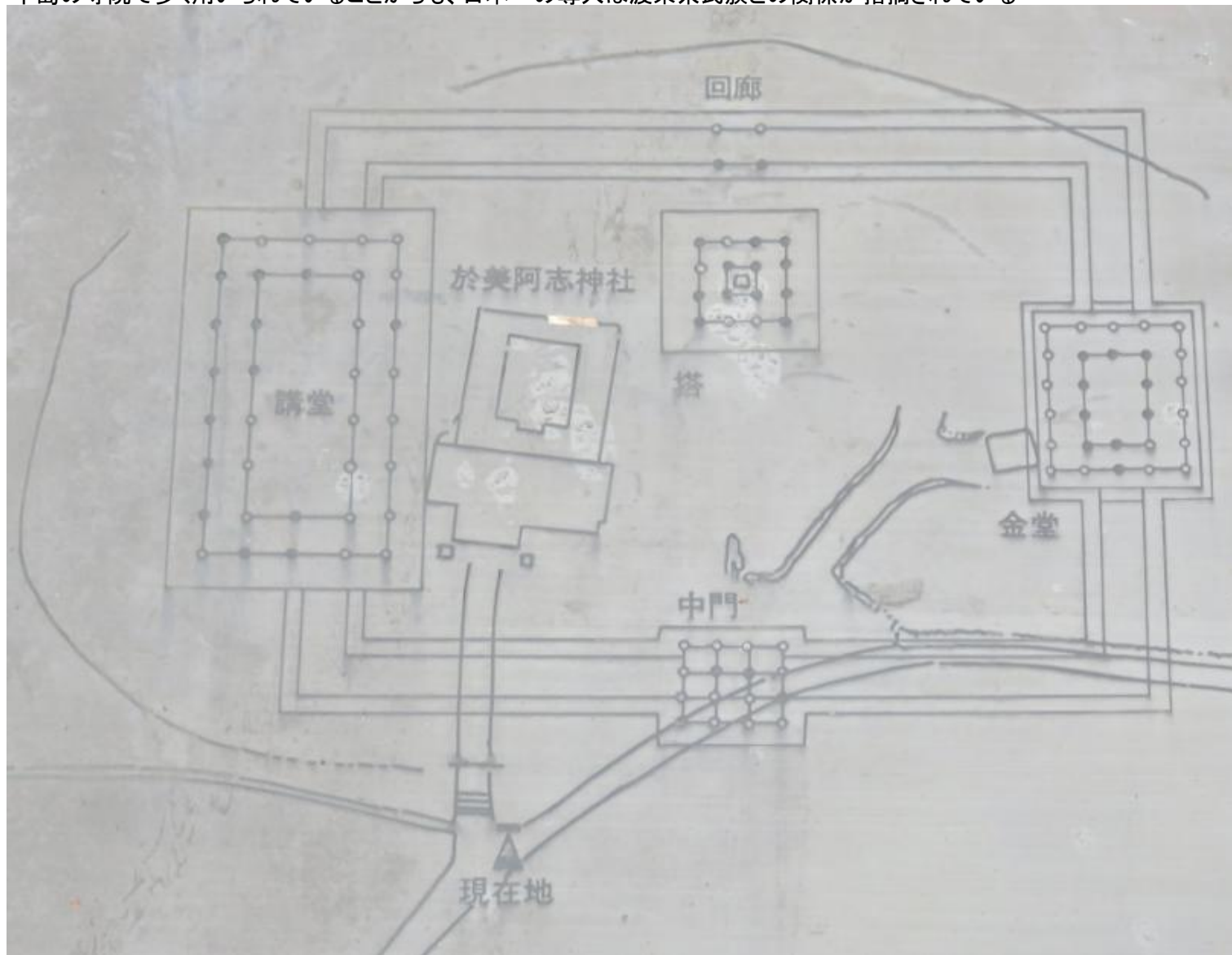
於美阿志神社・檜隈寺跡



檜隈は、百濟から渡来した阿智使主が居住したと伝えられ、於美阿志神社はその阿智使主を祭神とする。檜隈寺跡は、その神社の境内にあり、塔・講堂と推定される建物跡をのこす。「日本書紀」天武天皇朱鳥元年の条に檜隈寺の寺名がみえ、寺跡からは、7世紀末の瓦が出土する。現在塔跡にある十三重石塔は上層の一部を欠いているが重要文化財に指定されている。

明日香村
飛鳥保存財団

伽藍配置は塔の北に講堂があり、南に金堂を置くという特異な配置であり、かつ瓦積基壇という工法は近江、山城、そして朝鮮半島の寺院で多く用いられていることから、日本への導入は渡来系氏族との関係が指摘されている



於美阿志神社拝殿



ここにも説明坂がある



ひのくまでら
史跡 檜隈寺跡 講堂

講堂は昭和56年に、奈良国立文化財研究所によって発掘調査され、建物の大きさと構造が判明した。講堂基壇の規模は東西35.3m(120尺)、南北21.2m(72尺)、高さ1.2mである。基壇化粧には瓦積基壇を採用しており、後に玉石によって補修がなされている。

建物の規模は桁行29.4m(100尺)、梁間15.3m(52尺)の7間×4間の四面庇建物である。これは飛鳥寺や法隆寺西院伽藍の講堂に匹

敵する大きさとなる。出土した瓦の年代から、講堂は塔と一緒に7世紀末頃に造られたと考えられる。

この講堂のような瓦積基壇をもつ建物は近江の崇福寺・南滋賀廃寺、山城の高麗寺などで見られるが、飛鳥では初めて見つかったものである。

また、瓦積基壇は朝鮮半島に多くみられる基壇化粧であることから、檜隈寺が渡来系氏族である東漢氏の寺として建てられたことを物語っている。



▲ 瓦積基壇(北東から)





ここが講堂跡の礎石群



こな塩梅



これが本殿/流造銅葺



そこから拝殿前を見たところ



さまざまな境内社が祀られている





ひのくまのいおりのみや

この辺りに宣化天皇の檜隈廬入野宮があったといわれている





この辺りは中門跡か



この辺りは金堂跡か



前方が重要文化財である平安時代に造られた十三重石塔



檜隈寺の廃絶後、塔心礎の上に建てられていたが、近年石塔を積み直し、心礎は移動し保存されたと云う



元々は十三重であったが、現在は十一重で、上の二重と相輪は亡失してしまった



これが塔心礎



ここは檜隈寺跡前休憩案内所





すぐ前に見える檜隈寺跡や近くの檜前遺跡群には渡来人の足跡がいっぱい

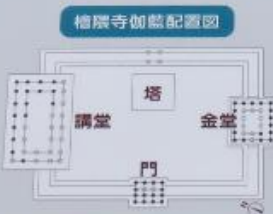
渡来系氏族「東漢氏」の氏寺と考えられる檜隈寺

渡来系氏族とは……

渡来人とは、海を渡って日本にやってきた東アジアの人々のこと。なかでも有力な一族を渡来系氏族といいます。飛鳥に最初に足を踏み入れた渡来人は檜隈民使博徳と身狭村主青とされ、この二人の子孫がやがて渡来系氏族・東漢一族となって後に飛鳥文化形成に大きな役割を果たしました。

渡来系氏族の氏寺であったと考えられる檜隈寺。

この正面に見える於美阿志神社は、渡来系氏族である東漢一族の氏寺として造られた檜隈寺があった場所とされています。檜隈寺講堂の基壇は周囲に瓦を積んで化粧していますが、これは他地域の渡来系寺院にも多く見られる特徴で、檜隈寺が渡来系氏族の氏寺であったことを示していると考えられます。



講堂瓦積基壇



檜隈寺の想像図

イラスト:黒川和子

外国風の暮らしのあとがみえる檜前遺跡群とその周辺

声:
渡

発掘された古代建築の遺構から渡来人の暮らしがうかがえます。

檜隈寺のあるあたりには檜前遺跡群という古代の遺跡が残っており、この地域一帯が東アジアからやってきた人々が暮らした地であったことが推測できます。

L字形カマド

カマドの煙を、家の中の壁沿いに設けたL字形または逆L字形の煙道を通して外へ出します。



大壁建物

細い溝を掘り、その溝の中に柱を立てて壁を造る建物のこと。柱自体は土壁に塗り込められて外からは見えない構造です。



オンドル

カマドの焼き口から延びる煙道を居住空間の床下に通し、床を暖めることによって部屋全体をも暖める設備。朝鮮半島で広く使われる暖房設備です。



声なき出土遺物が語る 渡来文化のあかし



金銅製光背飛天像



小金銅仏片



軒丸瓦/裏刻書「吳」

金銅製飛天像や小金銅仏の手、「吳(吳)」とへら書きされた文字瓦、特有の紋様をもつ瓦など、檜隈寺の周辺から見つかった遺物は、渡来文化が伝わった証であると考えられ、檜隈寺の特徴のひとつです。

出土瓦

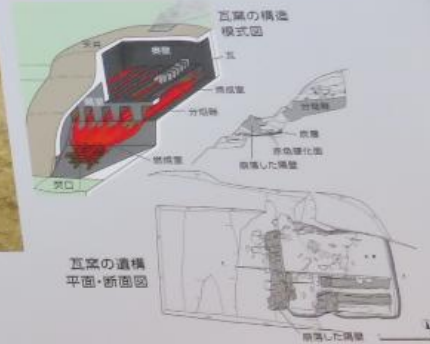


瓦窯跡に見える 時代をついで改修をくり返した檜隈寺

2014年7月、檜隈寺跡の講堂跡からおおよそ50m北西(この施設の西側すぐ)で瓦窯が発見されました。檜隈寺の創建は7世紀頃と考えられていますが、窯の構造や土中に埋まっていた平安時代の土器や瓦から、10世紀頃、寺を補修する時に使われた窯と考えられています。窯が埋まっていた土からは創建時の瓦も出土していますが、こうした古い瓦は窯を造る材料として使われたようです。天井部や焚口部が完全に平らに削られていたことから、瓦を焼く焼成室に畦を設ける有畦式平窯であることがわかりました。



瓦窯の遺構



現在の檜隈寺跡では 創建時以降の史跡や文化財が見られます。

日本書紀において諱(本名)を檜隈高田皇子とされる宣化天皇の都「檜隈廬入野宮」(536~539年)は、この地にあつたと伝えられていますが、定かではありません。現在、檜隈寺跡では、檜隈寺の講堂基壇や東漢氏の祖・阿知使主を祀ったとされる於美阿志神社や、平安時代に造られた十三重石塔(重要文化財)を見ることができます。



於美阿志神社



十三重石塔(重要文化財)

手前に説明坂があった



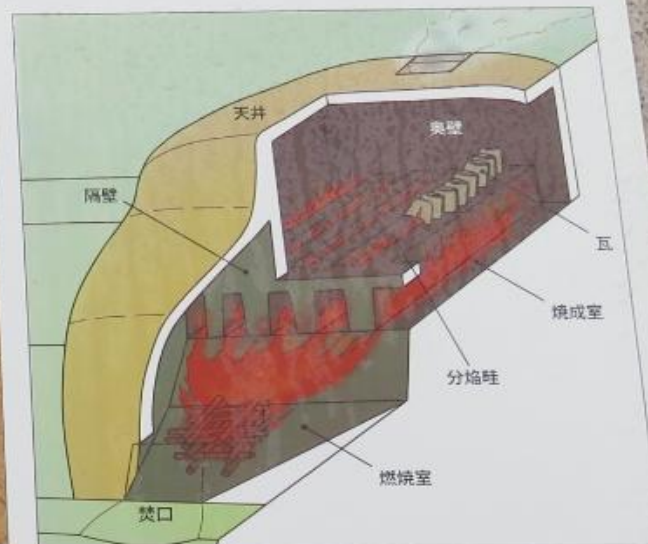
地中に眠る古代の工房 Ancient Workshop Lying Underground



地中に保存されている瓦窯の位置



発掘された瓦窯



瓦窯のしくみ



この丘陵の斜面で檜隈寺に関連するとみられる瓦窯が初めて発見されました。

瓦窯は奈良時代の8世紀後半以降に一般化する有畦式平窯で、平安時代に檜隈寺を補修するためにつくられたものであったと考えられます。現在は遺構を砂で保護して、地中に現地保存されています。

明日香村では、新たに地面を掘る場合は必ず埋蔵文化財の調査を行うことになっています。国営公園の整備にあたって、事前に調査を行い、発見した遺構はこの瓦窯のように砂で保護して土で埋め戻し、「地中保存」をしています。みなさんが歩く場所の足元には、千数百年前の遺構が眠っているのです。

A roof-tile kiln, possibly related to Hinokuma-dera Temple, was discovered on the slope of this hill.

The kiln had a flat-floor with border strips that had become common from the latter half of the 8th century (Nara period), and it is thought that it was built for repair work to Hinokuma-dera Temple in the Heian period (794-1185 CE). At present, the structural remains of this kiln are protected with backfilled sand in their original underground position for "preservation" purposes.

When digging the ground in Asuka Village, it is required to carry out surveys on buried cultural properties. Also, such surveys are conducted prior to maintenance and improvement work in the national government park. If structural remains are discovered, they are to be protected with backfilled sand for "preservation underground."

Beneath your feet lay many structural remains dating back well over a millennium.

参考ホームページ

<http://www.asukabito.or.jp/spotDetail2.html>

<http://sakuwa.com/yw52.html>

https://blogs.yahoo.co.jp/asan19431007/42925348.html?_yvsp=5qGn6ZqI5a%2B66Leh

<https://asamovosi.wordpress.com/2017/05/21/%F6%AA%9C%F9%9A%88%F5%AF%BA%F5%9D%80-%FF%BC%88%F5%A5%88%F8%89%AF%F7%9C%8C%E3%83%BB%F6%98%8F%F6%97%A5%F9%A6%99%F6%9D%91%FF%BC%89/>

<http://small-life.com/archives/13/08/1220.php>

<https://www.asukanet.gr.jp/ASUKA2/ASUKATERA/hinokumadera.html>

<https://barakan1.exblog.jp/6717340/>

<http://www.yasaka.org/kamigami/omiashi.html>

http://www.genbu.net/data/yamato/omiasi_title.htm?print=on

<http://www.geocities.jp/engisiki/yamato/html/031326-01.html>

